

日本の医療の行方と日本人の死生観
— 神戸・京都・長野の現場から —

主催：立命館大学・GN21（グローバルネットワーク21）

日時：2015年3月7日（土）

受付 13時
開始 13時30分～17時30分

入場無料

場所：立命館大学朱雀キャンパス2階203号室

（JR嵯峨山陰線京都駅31番乗り場より二つ目「二条」駅直ぐ）

パネリスト：



色平 哲郎

（JA長野厚生連佐久総合病院地域ケア科医長・内科医）



金 守良

（神戸朝日病院院長・消化器内科医）



吉中 文志

（京都民医連中央病院院長・循環器内科医）

以上50音順



安齋 育郎

（立命館大学名誉教授・医事評論などに取り組む）

司会：片岡幸彦（GN21代表）・桂良太郎（立命館大学国際関係学部教授）

「医は仁術か技術か算術か」とも言われて来ましたが、政治経済社会の劣化が問われ、少子高齢化社会が進む今の日本で、私たちの多くが関わっている医療がどういう状況におかれているのか。

そこにどういう問題が介在していて、それらが今後どう解決されて行くのか、また行かないのか。

医師として日々患者と向き合い格闘し、かつ病院経営にも責任を担っておられる三人の現役医師にお話を聞き、意見をぶつけ合って頂くことにしました。

「生老病死」、人は20歳から老いが始まると言われます。

また生を享ければ、いつか必ず病を得、死と向き合わなければなりません。

また死を自覚してこそ、生き活きとした人生が送れるとも言われます。

どう生きていかに死を迎えるか。私たちにとっても永遠のテーマです。

若い方も含め、多くの方のご参加をお待ち申し上げます。

お問い合わせ：グローバルネットワーク
Global Network 21（GN21）

京都市西京区大枝北福西町4-1-1, 5-302 Tel&Fax 075-748-9638

<http://www.gn21.net>